新ミュージアム散歩

アジア文明博物館

Asian Civilisations Museum

Image courtesy of the Asian Civilisations Museum

『悠久の時を刻む陶磁器』

（3階常設展示　陶磁器ギャラリー）

昨年アジア文明博物館に陶磁器ギャラリーがオープンしました。展示の中心は最も長い歴史を持つ中国。世界の人々を驚嘆させた陶磁器の歴史は新石器時代に遡ります。人類は狩猟・移動の生活から農耕・定住の生活に移行し、食糧の保存や食事のため器を作りました。驚くべきことにこの時代に既に窯があり、摂氏1,000度にも達していたと考えられています。陶磁器は「土」「水」「火」「空気」の要素で作られています。土を水で柔らかくして形をつくり、天日干し又は火と空気を使い焼き固めたものが陶磁器の始まりです。割れても形が残る陶磁器が現代に伝えてくれる情報と共に展示品をご紹介いたします。

歴史の記録

古代中国では、人間の魂は永遠不滅で来世は現世の延長と考えられていたため、故人と共に様々なものを埋葬しました。埋葬用に作られた非実用品を明器と言います。明器について『荀子』礼論篇第19節には、実用しないことを明示するため実用性を排除すると書かれています。これは生きていてほしいが実際は戻らないという哀悼の意を重んじる考え方と言われています。明器は青銅や木材でも作られましたが、錆びたり腐ったりしない陶磁器の明器は、当時の人々の暮らしや思想、建築技術を知る資料となります。こちら（写真①）の明器は、鉢に魚や鳥が配置され池が表現されていることから、水中の建物である水榭と考えられます。中には踊り子や音楽家の姿も見えます。弓を持つ人物の存在から見張り台の役割を果たしていたと考えられています。バルコニーや屋根は斗栱（ときょう）という腕木で支えられ、清朝まで使用されていた伝統的な構造様式となっています。同様の木造建築は日本では法隆寺の五重塔などに見られますが、中国では漢の時代に既にこのような建築技術が存在したことを示唆しています。

翡翠の美

青磁は鉄を含んだ釉薬（ゆうやく）が発色して誕生します。中国では皇帝のために作られ、アジア各地に伝わりました。釉薬とはガラス状のコーティングのことで、鉱物の配合や焼成温度、窯の酸素量等の条件により、灰色や青みがかった緑色からオリーブ色まで多様な青磁が作られました。青磁の本来の形は、宗教的な儀式に用いた青銅器がモデルでした。また色は「玉」即ち翡翠を目指したと言われています。青銅器の形及び翡翠の色ということから、青磁は最も高貴な器とされました。こちら（写真②）は耀州窯（ようしゅうよう）の青磁で、色と文様の彫り方に特徴があります。オリーブグリーンと称される色は、釉薬の鉄分による影響のほか、燃料の変化による影響も大きいと言われています。燃料は唐時代より薪を使用していましたが、宋代に入ると薪が不足したため石炭へと変わりました。これに伴い窯も石炭に適した構造の饅頭窯（まんじゅうがま）に発展しました。また文様の彫り方は、輪郭に沿って斜めに切り込む片切彫りの技法が使われています。深く彫られた部分には釉薬が厚く溜まり、色が濃くなることで明暗のコントラストが生まれ、装飾が浮かび上がって見えます。

写真① Tower with moat（25-220）
Collection of the Asian Civilisations Museum.
Purchased with funds from The Shaw Foundation

写真② Jar with petal rim（960-1127）
Collection of the Asian Civilisations Museum

白磁に咲く青い花

白磁の素地にコバルトで絵付けし、透明釉をかけて高温で焼成された磁器を青花と言います。コバルトは紀元前も使用されましたが、現在の研究では大規模な使用は元代頃からとされています。主にモンゴルの支配者により広められました。青は伝統的に天国と関連付けられた重要な色でした。こちら（写真③）の作品は装飾に濃淡があります。康熙帝時代の特徴で水墨画のようにも見えます。康熙青花磁器の青色の明度と彩度、大胆な装飾は、中国史上最高傑作の1つとなりました。生産地である景徳鎮では、明・清の時代は皇帝の磁器を製作していました。厳格に審査された合格品のみが献上され、不合格とされた作品は処分されていました。現在では発掘調査により処分品についても多く研究されています。

写真③ Vase with panelled decoration（1662-1722）
Collection of the Asian Civilisations Museum.
From the Xiang Xue Zhuang Collection in memory of Dr Tan Tsze Chor

彩りの写実表現

景徳鎮では様々な技法が開発され、多彩磁器「五彩」も誕生しました。一度高温焼成した白磁に色絵具で模様を描き、再び低温焼成したものです。「五彩」という言葉は中国の陰陽五行説における黄・赤・青・黒・白の5色又は多種の色を表し、5色に限定するものではありません。「五彩」を硬彩と呼ぶのに対し、軟彩と言われる「粉彩」の技法があります。ヨーロッパで流行した無線七宝の技術を取り入れ、雍正帝の時代に確立しました。様々な色彩のエナメルや透明・半透明の釉薬の開発により「五彩」では困難な色彩の微妙な変化や濃淡の表現が可能になり、西洋絵画のような作品が誕生しました。こちら（写真④）は菊の花の間を蝶が飛ぶ様子が描かれています。菊は文人の高潔さの体現とされる植物のひとつで、寒い秋に花を咲かせることから強さと長寿の象徴でもあります。柔らかな色味に加え、繊細さと写実的な表現が印象的です。花鳥画の大家だった恽寿平のスタイルに影響を受けたものと考えられています。

写真④ Dish with butterflies and chrysanthemums（1723-35）
Collection of the Asian Civilisations Museum.
Mr. Saiman Ernawan, c/o Mdm. Lim Siew Yong,
Raffles Fine Art Auctioneers Pte. Ltd

白い黄金

福建省の徳化窯は白磁で世界的に有名となりました。この地で採れる土は、不純物が少なく焼成時に歪まないという性質から複雑な形を表現できました。真っ白な素地に釉薬をかけ酸素が豊富な環境で焼成され、温かみのあるアイボリーの色合いが実現しました。象牙や白翡翠とも言われる滑らかな磁器は、ヨーロッパでは白い黄金と賞賛され貴族や王族に盛んに収集されました。中でも最大の収集家と言われたドイツのザクセン選帝侯アウグスト2世は、磁器を自国で製作したいと考え、錬金術師ベドガーに東洋磁器の解明を命じました。1709年についに白磁製作に成功し、ヨーロッパ初の磁器窯マイセンが誕生しました。徳化窯の白磁は神話や物語を題材とした作品も多く、こちら（写真⑤）は物語の1節を表しています。一方はある人物がもうひとりの人物を鉾槍で脅している場面で『三国志』に基づくものです。もう一方は中国で人気のある演劇『西廂記』の場面です。作品の精密さからも技術力の高さが際立っています。

写真⑤ Theatre scenes（18th century）
Collection of the Asian Civilisations Museum

中国の陶磁器は世界に多大な影響を与えてきました。その多くは「誰」が作ったのかは明らかではありません。無名の職人たちが自然の材料をもとに工夫を重ね苦心の末に誕生した作品の数々。異国の技術に驚嘆し自分たちの手で作りたいと願った感性。悠久の時を刻む陶磁器には様々な物語があります。ご案内と共に自由な想像を巡らせていただき、ギャラリーで過ごされる時間が楽しいものとなることを願っています。

＜ミュージアム日本語ガイドグループ　藤田慶子＞

私達ミュージアム日本語ガイドグループは、Friends of the Museums に所属し、シンガポール国立博物館（NMS）、アジア文明博物館（ACM）、シンガポール美術館（SAM）、プラナカン博物館（TPM）にて、日本語によるボランティアガイドを行っております。
*シンガポール美術館（SAM）、プラナカン博物館（TPM）は現在休館中

■アジア文明博物館■ Asian Civilisations Museum
住所：1 Empress Place
開館時間：10:00～19:00、金曜のみ10:00～21:00
●常設展ハイライトツアー　不定期開催

■シンガポール国立博物館■ National Museum of Singapore
住所：93 Stamford Road
開館時間：10:00～19:00
●常設展ヒストリーギャラリーツアー　不定期開催
●シンガポール国立博物館アートツアー　一時休止中

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、日本語ガイドツアーは当面の間、不定期に開催します。
ガイドスケジュール及び新規入会については、公式ブログ https://jdguide.exblog.jp/またはFacebookページ「シンガポールミュージアム日本語ガイド」をご確認ください。